

報告

平成14年度総合学習プログラム実践記録

岡山県自然保護センター 西本 孝
岡山県自然保護センター 脇本 浩
岡山県自然保護センター 森 生枝

REPORT ON NEW PROGRAMS FOR THE PERIOD FOR INTEGRATED STUDY IN 2002 SCHOOL YEAR

Takashi NISHIMOTO, *Okayama Prefectural Nature Conservation Center*

Hiroshi WAKIMOTO, *Okayama Prefectural Nature Conservation Center*

and

Ikue MORI, *Okayama Prefectural Nature Conservation Center*

キーワード：しいたけ、実践記録、炭焼き、総合的な学習の時間、体験学習、たんぼ。

はじめに

平成14年度から学校教育の現場で総合学習（「総合的な学習の時間」）が導入された。

文部科学省は『「総合的な学習の時間」は、これまでと全く画一的といわれる学校の授業を変えて、(1) 地域や学校、子どもたちの実態に応じ、学校が創意工夫を生かして特色ある教育活動が行える時間 (2) 国際理解、情報、環境、福祉・健康など従来の教科をまたがるような課題に関する学習を行える時間 として新しく設けられるものです』（文部科学省ホームページ）と、説明している。

また、同ホームページには総合的な学習の時間の特色として、「自然体験などの体験的の学習が積極的に行われ」、「地域の人々の参加による学習や地域の自然や施設を積極的に生かした学習など」が行われることを挙げている。

岡山県自然保護センターは、自然環境の学習を推進する役割を担っており、平成3年の開所以来、これまで数多くの自然観察会を企画し、毎年一年間に30回程度実施してきた（岡山県自然保護センター、2003）。

自然観察会の内容は、平成3年の開所当初には講師が生きものの名前や生態を指導する講義型が中心であった。その後、平成6年度からは「田植え」や「稲刈り」といった体験型をまじえるようになった。最近では、身近な自然である里山が保全の対象となり、生きものの多様性が注目されるようになった流れを受けて、平成11年以降、敷地内に残されたたんぼとそのまわりの里山を生かして、たんぼの作業や森林の作業を体験する、体験型の学習を積極的に自然観察会に取り入れ、実施するようになってきていた。

平成14年度からの小・中学校への「総合的な学習の時間」の導入にともない、これまで実施して

きた自然観察会の企画内容を元にして、里山の特色が残された身近な自然環境が学習できるような新しいプログラムを開発して実施に移すことにした。特に、「総合的な学習の時間」の趣旨にあった内容を選定して、その内容を学校の実状に合ったものに編集し直して提供することにした。

ここではセンターで平成14年度に独自に開発・実践した総合学習用のプログラムに関して、開発に至った経緯やアイデアを紹介するとともに、このプログラムを実施した時の記録をもとにして実践記録としてまとめた。同時にプログラムに参加した子どもたちや引率の先生の感想、また、現地で中心的な指導を行っていただいた佐伯町のシルバー人材センターの方々やセンターのボランティアの方々の感想も併せて掲載した。

このプログラムを実施するにあたり、地元のシルバー人材センターの方々、地元の教育委員会、小学校の校長先生をはじめとする先生方、センターのボランティアの皆さんなどたくさんの方々の協力をいただいた。本論にはいるに先立ち、感謝の意を表したい。

プログラム開発の背景

1. センターの地理的位置

センターは岡山県の中部にあり、古くから農業を通じた人と自然のかかわりあいがか濃く残された地域にある。約100ヘクタールの敷地には今もたんぼとその周辺にある里山が残されている。共有地として利用されてきた敷地内の様子は、元の所有者から生きた言葉として話を聞くことができ、昔から続けられてきた農作業のことを知ることができた。ここで営まれてきた農作業は、自然がうまく循環するように、昔の人々が合理的に行ってきた作業であった。『適切に利用しさえすれば、「自然の恵み」が尽きることなく、そこに依存した人々の生産や暮らしが維持される。その意味で、里山は、模範的な維持可能なシステムであったということもできる』（武内、2001）。そこにすむ生きものも、人の活動に合ったライフサイクルを持ったものが適応し、生き残ってきたものであると考えられる。

2. 二次的自然の見直し

このような人間によって作り出されてきた二次的な自然の重要性を訴える動きが大きくなっている。二次的な自然を構成する「里地」や「里山」は、用語として最近用いられるようになったものである。里山は四手井（2000）には「村里に近い山という意味として、林学で用いる『農用林』を『里山』と呼ぼうと提案した」と書かれてある用語である。また、里地は1994年12月に策定された環境基本計画で「自然と人間との共生の確保」が長期的な目標とされ、山地自然地域、里地自然地域、平地自然地域、沿岸海域の各自然地域ごとの施策の展開が求められた際に、山地と平地の中間地域として位置づけられた（環境庁、1994）。環境庁（1994）によれば、里地には二次的自然が多く存在し、野生動物と人間が共存してきた地域であり、この地域は農林業活動などさまざまな人間の関与によって環境が形成され、人々がふるさとの風景として思い浮かべてきた地域である、とされている。

二次的な自然は多くのつながりを持つ。その一つに、季節がめぐり、何度も繰り返していくなかで、生きものの営みが永続していくという時間のつながりがある。人と自然とが関わりをもって、時間のつながりの中で作り出されてきたのが二次的な自然である。そこにはおじいさんやおばあさんから、おとうさんやおかあさんを経て子どもたちへ、とつながっていく世代の繰り返しの営みがある。

また、たんぼに入って取った草を団子状に丸めてもう一度泥の中に押し込む、という知恵に見られるような物のつながりがある。雑草はそのまま大きくなれば稲の成長を阻害するが、もう一度土に埋めれば稲の栄養になるという知恵がそこにはある。こうして物はめぐっていき、というつながりである。

さらに、たんぼがあって、その周囲をめぐって溝や石積みがあり、刈りあげ地を経て周囲の森とつながっている。森から落ち葉を集めてきて、刈った草と一緒にして堆肥を作る。一連の作業の中でこうした空間的なつながりを体験していく。そこにはカエルが跳ね、イナゴが飛び跳ねていく生きものが躍動する空間的なつながりもある。

3. 体験学習の重要性

子どもたちはたんぼの作業を体験することにより、里地・里山の自然は人々が古くから自然の循環をうまくとらえて、合理的につくり出されてきたものであることを理解するとともに、たんぼや里山の生きものを継続して観察することによって、生きものを生きた状態で身近に感じることができるようになるべきものである。しかし、体験を伴わず、単に解説を聞くだけでは、本質的な部分を十分に理解したことにはならない。また、たんぼの作業のうちで、田植え体験だけのような断片的な体験では、田植えをした後、米が収穫されるまでの間に、どれだけの労力を必要とするのか、という点にまでは理解がいたらず、一過性のイベント的な体験に終わってしまうおそれ大きい。

4. センターでのノウハウの蓄積

これまでセンターでは自然観察会で、「田植え」、「稲刈り」、「堆肥づくり」などのたんぼ作業に関する内容のものを企画し、親子での参加を呼びかけてきた。平成6年度からは「田植え」、「稲刈り」、「しめなわづくり」を、平成10年度からは「はせごえ」、12年度からは「田ごしらえ」、「草取り」、「ぬり田」、「泥あげ」といった、地味なたんぼ作業までも取り入れた内容となった。しかし、この自然観察会には幼稚園児以下の子どもを持つ親子での参加が多く、期待していたほど小学生は参加してこなかった。この自然観察会に参加した若いおかあさん自身も田植えは初めてというケースが普通であり、たんぼの作業に30代以下の若い世代が関わりを持たなくなっている現状を改めて知る結果となった。

たんぼの作業体験をこのような親子観察会での企画のような一過性のものとするのではなく、一連のものとして体験できるような企画を考え出す必要が生まれてきた。炭焼き体験プログラムも同様で、あらかじめ準備された原木を窯に詰め込むだけの体験に終わらせるのではなく、木を伐り出すところからはじめて、窯に入れるサイズにし、詰め込み、火をつけて焼くという一連の作業体験があった上ではじめて、炭焼きを体験したといえるのであって、窯から焼き上がった炭を取り出したときの喜びが実感として味わえるものとなるの

ではないかと考えられる。

5. 連 携

センターでは自然観察会や研修会など行事や敷地内の整備には、職員だけでは手が回らず、多くの方々の協力が必要であった。この中で佐伯町のシルバー人材センターの方々や自然保護センターのボランティアの存在は重要であり、皆さんからの献身的な協力が得られた。

1) 佐伯町シルバー人材センター

特にシルバー人材センターの方々の協力は欠かせないものとなった。総合学習を実施するには、その趣旨からは、現地のたんぼや里山の作業を指導する立場の方が不可欠であった。地元のたんぼとそのまわりの里山を活用してきた方々は、実質的には高度経済成長期以前の生活を知っている人たちである。子どもたちから見れば、おじいさんやおばあさんにあたる人たちである。地元のシルバー人材センターのメンバーが、年齢的にも昔の生活を身をもって知り、体で農作業を覚えている方々であった。

このメンバーは60～70代で、体型的に農作業に適した引き締まった体をしており、足腰の強靱さはいうまでもなく、体全体が筋肉質の体をしてきた。子どもの頃から、生活のために作業をしてきた証として、引き締まった無駄のない、人として自然の体型を作り上げていたように思われた。

シルバーの皆さんの存在が、このプログラムの実施には欠かせないものとなった。シルバーさんにはセンター内の森林の下刈りや湿原周辺の草刈りなど、日々の清掃作業では追いつかないまとまった作業について、期間を限定してお願いしていた。開所当時には予想されていなかったこうした作業を、シルバーさんをお願いして実施していただく中から、里山の管理作業とは何かを学ぶことができたのである。

シルバーさんの存在が欠かせないことになったきっかけは、開所後、荒れた森林の管理や湿原の保全を含めた草刈り作業など、大がかりな作業を必要とする業務が生じてきたことであった。この管理作業を引き受けていただいたのが、当時立ちあがったばかりの佐伯町の社会福祉協議会に所属するシルバー人材センターに登録された方々であ

った。センター内の森林の下刈り管理をお願いしていく中で、里山として維持していくためにはどのような管理が必要なのか、また、たんぼ作業には何が必要なのか、ということから管理作業方針が決められていった。この方針はシルバーさんとの作業の打ち合わせの中から出てきたものであり、リーダーの役割をしてくださる方の存在も重要であった。

また、作業には裏方的な仕事もあった。田植えをするには苗づくり、田起こしなどの田植えまでの作業、稲刈り後の乾燥、脱穀、精米の作業までをお願いすることになった。こうした陰の力があつたからこそ、このプログラムは実施に移すことができたと考えている。

さらに、全体の流れ、段取りをして、指導的立場にたつて解説をすることができる方はシルバーさんの中でも限られていた。中心的な立場で、前に出ていただける方の存在も重要であったと考えている。

2) センターボランティア

センターでは研修会の修了者を対象として、平成5年度からボランティアの登録を行ってきた。自然観察会の指導、敷地内の整備などのセンターの活動にさまざまな角度から協力いただいていた。今回のプログラム実施にあたっては、作業内容がたんぼや里山の管理などに関するものであったことや、実施日が平日であったことなどから、協力していただける方はおのずと限定された。それでもたんぼや山の作業を経験したことのある方や平日でも協力可能な年輩の方が中心となり、昔の作業を思い出していただきながら、指導をしていただいたり、準備の作業を手伝っていただくことができた。

プログラム開発のポイント

このようなプログラム作成の背景が、今回の総合学習の企画をする上でのベースとなった。これらの内容を発展させた形で再検討して、5回のコースとして企画を立ち上げた。日時は作業内容と学校の授業の進行とを調整した上で、現場での意見を聞きながら決定することとした。

1. 自主性を引き出すプログラムとは

文部科学省のホームページに掲載された「総合的な学習の時間」のねらいには、子どもたちが『(1)自ら学び、自ら考える力の育成 (2) 学び方や調べ方を身に付けること』が挙げられ、『子どもたちの自主性を重んじるため、自らの課題を自らが考え問題解決のために実行する』ことが目的とされている。

センターで実施するにあたり考えられたことは、用意されたプログラムを実施するだけでは、子どもたちの自主性を育てることが困難であり、生きる力を育てることはできないことが心配された。しかし、自然にふれる機会が極端に減少した現実では、プログラムを用意してでも、自然との関わりを持つ体験の場を提供し、教える機会を持つことが、子どもたちの満足感を引き出し、それを継続することによって自主性を引き出すことができるのではないかと考えられた。

2. 文化としての農作業

たんぼや里山での作業は、わが国で今から35年ぐらい前まではごく普通に行われてきた。センターの敷地で作業をしていた方からうかがった話では、農作業の時、おじいさんやおばあさんは孫を連れて行った。しかし、孫は作業を手伝うのではなく、おたまじゃくしなどの生きものと遊びながら、おじいさんがしていた作業をただ眺めていたに過ぎなかったそうである。おじいさんの米作りの仕事は真剣であり、小さい子どもたちの出番は全くなかったと言っていい。その時教えられないまでも、子どもたちは断片的ではあるが、おじいさんのする作業を脳裏に刻みつけている。

歳が進むにつれて作業を手伝えるようになっても、作業内容の全体的なことや段取りについてはわからなかったようである。しかし、自分たちが実際に中心になったとき、作業は一連のものとして頭の中でイメージでき、段取りをつけて、体を動かせるようになっていたという。こうした話がセンターの管理作業をお手伝いいただいているシルバー人材センターの方々の証言の中から明らかになった。

たきものづくりで、小枝をつくって集めたたきものの束を縄で結わえる時も、シルバーさんたち

は同じ方法で結んでいた。何十年かぶりにした久しぶりの作業であっても、忘れずに思い出して結ぶことができた。シルバーさんたちからは体が覚えている、と教えていただいた。結び方も多くの人が同じ方法で行うには、それなりの合理性が備わっているはずである。こうすればよりほどこけないように結びつけることができると思うと多くの人の手を経て、完成されてきたものと考えられる。ちょっとした工夫が積み上がっていることを実感できた。

3. 伝承文化の連鎖

受け継いできたものを次の世代に伝え、教わったものをよりよいものとして完成させていくという連鎖は、それまでの方法を体得したうえで、さらなる発展を望むものであると考えられる。

こうした伝承がとぎれている現状では、まず教え、体験させ、それに慣れていくことにより、さらなる発展に向かう方向を模索する必要があるであろう。それには60代以上の方々が存命中に昔の作業体験を教えてもらっておく必要がある。墓に持って行かれては困ることになるだろう。

体験プログラムの原案

原案の作成段階で、以下の内容のものを提出し、内部で検討した。

1. 実施と対象

平成14年度は最初の試みとして、里山の保全をテーマとした3種類のプログラムを、各コースとも5回継続して実施する。小学校の1クラス40名程度までを対象とし、毎回バスを利用する。岡山県教育委員会と連携しながら実施する。

2. 募 集

教育委員会を通して、各学校から参加を募る。応募者多数の場合は抽選する。

3. 実施計画

1) たんぼコース

たんぼの1年間の作業を体験する。

- ①田植え 6月上旬

- ②草とり 6月下旬
- ③はせごえ 7月中旬
- ④稲刈り 10月下旬
- ⑤落ち葉かき 冬期

2) 里山コース—炭焼き—

里山の森林から低木を伐りだし、炭焼きを体験する。実施期間は冬期（12月～2月）。

- ①ノコを使う
- ②たきものづくり
- ③玉切り
- ④詰め込み・火入れ
- ⑤窯だし

3) 里山コース—しいたけ—

里山の森林から低木を伐りだし、しいたけのほだ木づくりを体験する。実施期間は冬期（12月～2月）。

- ①ノコを使う
- ②たきものづくり
- ③玉切り
- ④コマ打ち
- ⑤運搬・設置

4. そ の 他

このプログラムを実施するにあたりポイントになったことは、参加する小学校からセンターまでの交通であった。年間5回にわたり定期的に1クラス分の児童を安全に運ぶ交通をどのように確保するか、という問題である。1コースあたり5回通ってくる必要があるのも、子どもたちには往復のバス代の負担が生じることになる。

幸い、町所有のバスが利用できることになり、交通の問題については解決した。しかし、地元以外の学校が希望した場合には、センターまでの交通は最も重要な問題となり、このプログラムを実施するにあたって大きなネックとなることが予想される。交通の問題をクリアし、プログラムをさらに発展させていくためには、多くの機関との連携が必要となるだろう。

引用文献

環境庁編，1994.『環境基本計画』，160pp. 環境庁.

岡山県自然保護センター，2003. 岡山県自然保護センター年報—平成13年度. 78pp. 岡山県自然保護センター.

四手井綱英，2000. 里山のこと. 関西自然保護機構機関誌，22 (1)：71-77.

武内和彦，2001. 二次的自然としての里地・里山. 『里山の環境学』(武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史編)，p.1-18. 東京大学出版会，東京.

文部科学省ホームページURL

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/020501.htm